

ふくろうをからかうな

スイス

ある夏の美しい夜のことに、羊飼いが、山小屋の前にすわって、ポレンタを食べて牛乳を飲んでいました。すると、ふくろうが、近くの木にとんできて、オロク、オロクと、鳴きました。何度も鳴くので、羊飼いは、追っぱらおうと思って、オロク、オロクと、呼びかえました。それでも、いっこうに逃げて行きそうにないので、今度はこういって、呼び寄せてみました。

おまえはふくろう、わたしもふくろう

何か食べたければ こっちへおいで！

すると、ふくろうの頭をした男が、目の前に現れて、いいました。

「あんたが呼んでくれたんで来たんだが、何を食べさせてくれるんだね」

羊飼いは、まさかこんな男がたずねてくるとは思っていなかったので、ふるえながらいいました。

「じゃあ、そのなべの中に、ポレンタがあるから、腹いっぱい食べるといいよ」

男は、がつがつと食べ始めました。ポレンタのなべは、あつというまにからっぽになりました。男は、羊飼いに、

「おれは腹へこだ。何を食べさせてくれるんだ」といいました。

「あそこのおけに、ソフトチーズがいっぱい入ってるよ」

ソフトチーズのおけも、たちまちからっぽになりました。

「おれは腹へこだ。何を食べさせてくれるんだ」と、男はどなりました。

「あそこに、チーズのかたまりがふたつあるから、あれを食べてくれ」

チーズも、一瞬にして、男のお腹のなかに消えました。

「おれは腹へこだ。何を食べさせてくれるんだ」

「戸棚をあけてごらん。パンでも、粉でも、塩、砂糖、コーヒー、米、なんでも見つけ

たものを食べてくれ」

あつというまに戸棚もからっぽになりました。

男は、まるで百年も何も食べていないみたいのに、怒りくるってどなりました。

「おれは腹へこだ。何を食べさせてくれるんだ」

「そこに、牛乳部屋のかぎがあるから、行って、おけの牛乳を飲んでいい。たなのチー

ズとバターも食べていい」

五分もすると、男はもどつて来て、もつとががつしてわめきました。

「おれは腹へこだ。何を食べさせてくれるんだ」

「家畜小屋へ行つて、ぶたとやぎと牛を食べろ」

あつという間に、ぶたもやぎも、それに牛も一頭だけ残してぜんぶ飲みこまれてしまいました。その一頭は、首のすずりにマリアさまの像がほつてあつたのです。男は、この牛だけ食べられないので、かんかんになつてさげびました。

「何を食べさせてくれるんだ」

羊飼いは、頭をうなだれていいました。

「もう何も無いよ」

「それじゃ、おまえを食つてやる」

羊飼いは、さげびました。

「マリアさま、助けてください！」

そして、ベッドの枕元にぶらさげていた十字架をひたたくるようにしてつかみました。そのとたん、男は、叫び声をあげ、炎をふき出しながら、怒りくるつて戸口から飛び出していきました。羊飼いは、氣を失つて、床にたおれました。

しばらくして、羊飼いが目をさますと、あたりはすべて、もとどおりになっていました。なべの中にはポレンタがあるし、びんには牛乳があるし、おけにはソフトチーズがあり、チーズのかたまりは、いつも置いてあるところがありました。戸棚の中のものもぜんぶありました。牛乳はまたおけに入っているし、たなにはバターとチーズがあるし、ぶたもやぎも牛もみんな家畜小屋にいました。

それからというもの、羊飼いは、二度とふたたび、ふくろうをからかうことはありませんでしたとき。

ポレンタ・トウモロコシの粉を牛乳に混ぜて、オーブンで焼いたグラタン風の料理。アルプスの牧畜農民の常食。（原話の注より）

村上郁再話

資料『世界の民話1ドイツ・スイス』小沢俊夫訳／ぎょうせい